



月報

No. 4 4 2
2 0 1 7 年
3 月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目 34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『隣人を受け入れる人と受け入れない人』

ヨハネの手紙 三 1節～15節

小河信一 牧師

ヨハネの手紙 一 からヨハネの手紙 二 へ、そして本日、ヨハネの手紙 三 へと講解説教を続けてきました。

ヨハネの手紙 一 では神学的な立場から、繰り返し「互いに愛し合いなさい」ということが説かれていました(3:11,23、4:7,11,12)。そして、ヨハネの手紙 二 には、「互いに愛し合いなさい」(2:10)という勧めが一度出て来ます。ところが、ヨハネの手紙 三 には、その勧めが見当たりません。

そこで、ヨハネの手紙 三 を読むポイントは、ヨハネ文書(ヨハネ福音書では13:34、15:12など)の基本テーマである、互いに愛し合うということが、この手紙において、どのように具体的にあらわされているのか、ということです。

互いに愛し合うという文句自体は、ヨハネの手紙 三 に見られませんが、内容上、隣人愛はどのように取り扱われているのでしょうか？

単に口先ではなく、具体的なかたちで、隣人愛が証しされている、つまり、神の愛の掟が実践されていることを、ヨハネの手紙 三 から読み取りましょう。

まず初めに、ヨハネの手紙 三 という文書を理解するのに助けとなる短い言葉を、聖書外からご紹介します。

「愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある。」

マルティン・ブーバー『我と汝』より

「〈外人〉の視点を提供できることが宣教師の意義である。」

日本キリスト教団神奈川教区で伝道しているアメリカ人宣教師の言葉より

初めにまた、ヨハネの手紙 三 に出てくる人物を整理しておきましょう。

長老(2:1)、ガイオ(2:1)、ディオトレフェス(2:9)、デメトリオ(2:12)、及び「兄弟たち」(2:3,5,10)または「よそから来た人たち」(2:5)・「御名のために旅に出た人」(2:7)と呼ばれている人々です(他に「友人たち」2:15)。

そして、この手紙は長老・「わたし」からガイオ・「あなた」へ書かれた形式を採っています。類似するものにフィレモンへの手紙が挙げられますが、新約の書簡では珍しい、「わたし」から「あなた」への私信です。そして、「わたし」と「あなた」との関係を基

軸としながら、その他の人物が交流または対立している様子が描かれています。仮に A 教会と B 教会の構図で見ると、長老とデメトリオとが A 教会、そして、ガイオとディオトレフェスとが B 教会に属することになります。有力な学説に基づけば、A 教会のデメトリオが B 教会へ、このヨハネの手紙 三 を携えて行きました。そうした状況下で、親しくも「兄弟たち」と呼ばれる巡回伝道者たちが A 教会や B 教会を訪ねて回っていました。この手紙によれば彼らによって、ガイオのいる B 教会の様子が、A 教会の長老のもとへ、証しや報告のかたちでもたらされました。

ヨハネの手紙 三 :1——

長老のわたしから、愛するガイオへ。わたしは、あなたを真に（真理において）愛しています。

先にお話ししたとおり、この手紙は「わたし」から「あなた」へのメッセージとして一貫しています (:1,15)。その冒頭に「わたしは、あなたを愛しています」と告げられています。愛はどこに生まれるのか、それは、〈われとなんじ〉の〈間〉に起こり、在るものであると言う、マルティン・ブーバーの所論と合致しています。

たとえ相手がどんな状況にあろうとも、〈われとなんじ〉という関係になったときに、愛が育まれます。ヨハネの手紙 三 によれば、その際の要は「真理において」ということです。

すなわち、「真理」なる主イエス・キリストによって、その主イエス・キリストの十字架による罪の贖いと復活の希望に共にあずかることによって、真にわたしとあなたは愛し合えるのです。真に〈われとなんじ〉という隣人関係が結ばれるのです。

長老が「そちらの友人一人一人に」 (:15) と挨拶を送るほどに親密な B 教会の中でも、「あなた」にこそ、この手紙を差し出しますというところに、互いに愛し合っている実体があります。そして、「わたし」から「あなた」へと愛が交わされる際に、やはり「真理・真実」 (:12) において長老から信頼されるデメトリオが、愛の天使のように遣わされました。

ところで、皆さんはすでにご存知のように、「互いに愛し合いなさい」という命令は、旧約聖書にさかのぼるものです。

レビ記 19:33-34——

³³ 寄留者があなたの土地に(あなたと)共に住んでいるなら、彼を^{しいた}虐げてはならない。

³⁴ あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。

〈われとなんじ〉の関係にあるべき一人の「寄留者」、「あなたと共に」住んでいる「寄留者」を^{しいた}虐げてはならない、と命じられています。その否定命令に対置される積極的命令が、「自分自身のように愛しなさい」です。

この命令の記されているレビ記 19:34 の直前の 19:18 には「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」という、主イエスも取り上げられた重要な教えが出ています（マタイ福

音書 22:39)。レビ記 19:18 の教えが 19:34 において念押しされているという観点からは、「隣人」に「寄留者」が含まれることを重々忘れるな、とのメッセージが読み取られます。

ヨハネの手紙が書かれた当時形成されつつあったヨハネ教団が、「よそから来た人たち」や「御名のために旅に出た人」の働きを歓迎する背景には、脈々と言い伝えられた「寄留者を自分自身のように愛しなさい」という勧めがあったのではないのでしょうか。私たちもまた、或る意味では得体の知れない‘Stranger’「よそ者」を受け容れるべきかどうか、自分の判断ではなく、聖霊の導きによって見分けつつ、より大きな教会の交わりをつくっていくのです。

さて、手紙は挨拶のあと、「わたし」と「あなた」との関係が基軸であることを裏付けるように、「わたし」から「あなた」への魂の配慮、そして、「あなた」に対する「わたし」の喜びがつつられています。

ヨハネの手紙 三 :2——

愛する者よ、あなたの魂が恵まれているように、あなたがすべての面で恵まれ、健康であるようにと祈っています。

「あなたがすべての面で恵まれ、健康であるように」は手紙の常套句とも思われますが、「あなたの魂が恵まれている」との一句から、長老の牧会的配慮がうかがわれます。すなわち、「あなた」の礼拝と日常の生活について、「イエス・キリストによって内面的な恵みを赦されているということが土台になって見直され……生活全般にキリストの恵みが行きわたる」（松永希久夫）ようにと、長老は祈っているのです。

ヨハネの手紙 三 :3-4——

³ 兄弟たちが来ては、あなたが真理に歩んでいることを証ししてくれるので、わたしは非常に喜んでいます。実際、あなたは真理に歩んでいるのです。⁴ 自分の子供たちが真理に歩んでいると聞くほど、うれしいことはありません。

すでにヨハネの手紙 一 を説教したときに学んだように、当時のヨハネ教団、ヨハネの教会の群れには、グノーシスと呼ばれる異端が入り込んで来ていました。イエス・キリストが受肉して私たちの間に宿られたこと（I ヨハネ 4:2、ヨハネ福音書 1:14）を否定する人々によって、その教団・教会が揺さ振られていました。

A 教会の長老からすれば、今 B 教会がどうなっているのか、愛するガイオは伝道牧会できているのかどうか、心配事を挙げれば切りがなかったことでしょう。そういう中で、手紙の著者が何から語り出しているのか、に注目したいと思います。

そこで読み返してみると、「わたしは非常に喜んでいます……聞くほど、うれしいことはありません」というように、大いなる喜びを重ねて語っています。ヨハネの手紙 二 においても、本文の冒頭に「あなたの子供たちの中に、わたしたちが御父から受けた掟どおりに、真理に歩んでいる人がいるのを知って、大変うれしく思いました」（:4）とありますから、これは偶然の事ではなく、ここから明確に長老の信仰的姿勢が汲み取られると言えます。

あなたには、あなたの教会には、ほんとうに喜びがあるのだ、あるいは、私に喜びを与える子供たちがいるのだ、と告げています。その喜びというのは、人間の目から見てどん

な困難や挫折があろうが、神のまぎなしにおいては、あなたとあなたの教会は「世に打ち勝つ（すでに打ち勝っている）」（Ⅰヨハネ 5:4）ということに根差しているのではないのでしょうか。

ヨハネの手紙 三 :3 の一節で興味深いのは、「わたし」と「あなた」との愛し合っている関係、個と個のつながりが、ほかの人々によって、いっそう深められている点です。

「(B 教会から A 教会へと巡る) 兄弟たちが来ては……証ししてくれる」ことによって、長老のガイオに対する主にある交わりは新しく作り変えられています。つまり、〈われとなんじ〉の関係に、「兄弟たち」が介在することにより、〈われとなんじ〉の二人の愛し合う関係がますます強固になっているのです。

それはどういうことかと言えば、〈われとなんじ〉の愛の関係が、神の愛によって造られ保たれているものならば、それは、よその人との交流によって輪を広げていくということです。神の愛が保たれ、それが支配している「教会」(Ⅲヨハネ:6,9,10)においては、〈われとなんじ〉の関係が崩れそうなときにも、必ず助け手や祈る人が現れるということです。教会の中で、苦境にある隣人あるいはよその人に対し「兄弟」・「姉妹」として親身に接するとは、まさにそう言うことです。「兄弟たち」の働きを通して、今ひとたび、ガイオを想う愛を新たにされた長老は、以下のようにガイオに語っています。

ヨハネの手紙 三 :6——

彼ら(兄弟たち・よそから来た人たち)は教会であなたの愛を証しました。どうか、神に喜ばれるように、(あなたが!)彼らを送り出してください。

長老は、ガイオを心から愛するゆえに、厳しくも一つの事を勧告しました。「どうか」と懇願しつつ、主にある愛をもってガイオを訓練しています。それは、愛の教えを行う者となりなさいということ、まさに愛の実践への勧めでした。

長老は、B 教会の、他の誰かがというのではなく、「あなたが」もてなみなさいと命じています。善いサマリア人のごとくに(ルカ福音書 10:33-35)、巡回伝道者が疲弊して倒れ込んで来たならば介抱し、宿が必要ならば貸し、また、旅費が不足しているならば補う、等々のことを、「神に喜ばれるように」しなさい、というのです。約言すれば、「寄留者を自分自身のように愛しなさい」ということの実践です。

さて、B 教会に属するガイオは、やっかいな問題を抱えていました。長老は、この手紙本文で、第一には喜びを語りました。それは、手紙の作法に従ったとか、おべっかを使ったとか、そういうことではありません。「神は幸いなるお方である、確かに世に災いはある、しかし、神は災いからも幸いをつくり出すお方である」(参照:創世記 50:20、詩編 1:1-3、34:20、エレミヤ書 32:42、哀歌 3:27)という信仰に従って、長老は喜びをあらわしたのです。しかし、長老がそのような信仰を持っているがゆえに、幸いの陰にある災いを見逃しませんでした。

ヨハネの手紙 三 :9-10——

⁹ わたしは教会に少しばかり書き送りました。ところが、指導者になりたがっているディオトレフェスは、わたしたちを受け入れません。¹⁰ だから、そちらに行ったとき、彼のしていることを指摘しようと思います。彼は、悪意に満ちた言葉でわたしたちをそ

しるばかりか、兄弟たちを受け入れず、受け入れようとする人たちの邪魔をし、教会から追い出しています。

長老が「教会に少しばかり書き送りました……わたしたちを受け入れません」が述べているように、ディオトレフェスの問題に、以前から A 教会の信徒たちは心痛めていたようです。ガイオに助言し励まして、この問題を解決してもよさそうですが、長老はこの問題を自らのこととして捉えていました。

ディオトレフェスが「指導者になりたがっている」というその原意は、「自分が第一であることを愛好する」です（参照：マタイ福音書 20:20-21）。「自分が…自分が…」という思いに駆られることはない、と断言できる人はなかなかいないでしょう。

また、ディオトレフェスの「思い」が詳述されているわけではありませんが、もし、彼は自分の名誉・欲得に惹かれているというよりも、むしろ、危難に置かれた B 教会を「自分が率先して」良くしなければ、と考えているとすれば、問題はやっかい極まります。

その点で、本日の説教題に『隣人を受け入れる人と受け入れない人』と付けましたが、後者のようにならないで前者のようになれ、と単純に言えるものではありません。自分の中に「隣人を受け入れない人」のいることを認め、主の御力と兄弟の励ましによってその罪と戦い続けることです。

ガイオと愛の関係を結んでいる長老は、ディオトレフェスにも同様に、愛をもって関わろうとしています。

それは、「そちらに行ったとき」 (:10) または「近いうちにお目にかかって親しく話し合いたい」 (:14) という言葉の端に現されているように、長老は問題解決のための労苦を惜しんでいません。指導者として彼は、手紙の限界をわきまえています。

そして、長老は「彼（ディオトレフェス）のしていることを指摘しようと思います」と述べています。「指摘しようと思います」は、厳密には「（してきたこと・していることを）思い起こさせます」（英訳：I will call to mind）という意味です。つまり、事情を聴く側の、善悪の価値判断の先行するような、上から目線の「指摘」ではなく、本人が事情を振り返るのを、忍耐強く待つというニュアンスがあります。

ディオトレフェス自身が真に悔い改めるには、聖霊の導きと共に、そのような傍らにいる「兄弟」のとりなしが大切なのでしょう。あなたの抱えている事を、自分もまた担いたいので、出向くまで待っていてください、というのが、長老の祈りです。

このようにヨハネの手紙 三 を読んでくると、二つの教会の交わりによって、神の愛を互いに土台とする〈われとなんじ〉、互いに愛し合う兄弟姉妹が育まれていことが分かります。

ヨハネの手紙 三 は、A 教会から B 教会へ出されたものですが、その A 教会の長老は彼の友人たち (:15) と共に、B 教会を経てやって来た巡回伝道者から、B 教会にまつわる証しを聞いて励まされています (:3-4)。この A 教会と B 教会との関係は、一つの教会内の人と人との関係にも当てはまることです。教会と教会とが、また、人と人とが交流するとき、福音の波は大きくなっていきます。

最後に、よそから来た人、巡回伝道者を迎え入れる、あるいは、彼らと共に働く者となる (:8) というのは、今日、私たちにとって、どういうことなのでしょう。

目に見える形においては、教区には巡回教師がおられ、三教会の間では交換講壇を行っています。あるいは、この教会に転会して来られる方は「よそから来た人」であり、私たちが迎え入れた兄弟姉妹です。と同時に、私たちに身近な ‘Stranger’ 「よそ者」とは、今隣りに座っている人ではないでしょうか。「わたし」と「あなた」は元来、違う人です。一人ひとり、個性や考え方やその人生について異なっているのは言うまでもなく、それぞれに違った賜物をさずけられています。

「外の」人々を受け入れつつ、一人ひとりの信仰が養われ、苦難を越えて、教会が成長していくということが、ヨハネの手紙 三 に証しされています。また、それは、私たちの課題として適用されるべきことです。

なぜ、偽のものに惑わされないように (Ⅱヨハネ:7-11)、聖霊の導きを祈りつつ、〈外の〉人々を受け入れることが、キリスト教において重んじられているのでしょうか？

なぜ、「〈外人〉の視点を提供できることが宣教師の意義である」との言葉が印象深く感じられるのでしょうか？

外から来た人が、教会形成の内側においてかけがえのない働きをする——その原点は、主イエス・キリストの降臨と再臨にあります。厳密には、それを〈外から〉と言うのは正しくないかもしれません。より正確には、神の傍らかたわの御座から、父のふところから、向こう側から、私たちの間に来て、その内側深くに宿ってくださったのが、主イエス・キリストです。初め、人間はそのお方を受け入れようとしませんでした。

父なる神は、主イエス・キリストの十字架と復活の恵みを通して、人の頑かたなさかたくと罪を打ち砕かれました。神は繰り返し、「キリストが戸口に立って、たたいている (ヨハネ黙示録 3:20) 。中に入れなさい。キリストを信じなさい」と私たちに語りかけておられます。神のもとから来られた主イエス・キリストにある新しさに、日々生かされたいと願います。そのような御力による新しさを受けることによって、私たちの教会もまた、生き生きとした福音が保たれ、また、内側から働く力によって教会形成が進められてゆくのです。